

平成30年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題

1 研究主題

新たな知を拓き^{ひら} 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進
—主体的・対話的で深い学びを通して
自信と夢をもち未来社会を切り拓く子供の育成—

2 主題設定の理由

平成30年度で6年目となる「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」という研究主題は、新たな価値を創造し、これからの時代を切り拓く力と可能性もった子供の育成を意図し、設定されたものである。

今日の日本社会は、AI(人工知能)の飛躍的な進化、あらゆる面でのグローバル化、さらには高度情報化、科学技術の進展などにより近未来の社会構造の大きな変化が一層現実味を帯びてきている。また社会構成の激変ぶりと加速的に進行する少子高齢化に伴う生産年齢層の減少等、先を見通すことが難しい時代の到来を迎えている。更には地域や家庭の教育力の低下が、規範意識や人間関係の希薄化をもたらし、子供たちや家庭、学校を取り巻く環境に様々な影響が及んでいる。

こうした将来の変化の予測が困難な時代だからこそ、知・徳・体の調和のとれた教育活動を一層充実させていくことが今後学校教育における重要な課題といえる。自分や地域に対する自信をもたせ、自らの夢や希望の実現に向け、子供たちが社会の変化によりよく対応し、主体的に自分の力で人生を切り拓いていける「生きる力」を身につけさせていくことが重要であると考える。

平成30年度の本研究会においては、これまでの研究の実践や蓄積・成果を継承しつつ、新学習指導要領を見据えながら、子供たちの『学び(教育活動)の質』の向上を図っていくことに重点を置きたい。そのためには平成29年3月告示の新学習指導要領で示された「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、「何ができるようになるか」という学習する子供の視点に立ち、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学びの過程を重視していきたい。つまり、学びの方法は、単なる知識・理解にとどまらず、実社会や実生活の中で、知識技能を活用しながら課題の発見・解決に向けた「主体的・対話的で深い学び」による『学びの質』を改善していくことが必要であるとされている。この3つの視点による『学びの質』を深めるためには、不断の授業改善は元より習得・活用・探究のバランスと子供の学びを起点とした様々な取組や教育実践が今強く求められている。

また、新学習指導要領の理念として「社会に開かれた教育課程」の実現があり、よりよい社会を創るという理念を学校と地域社会が共有し、社会との連携及び協働により実現を図っていく「カリキュラム・マネジメント」が提唱されている。各学校で教科や学年の枠を超え組織運営を改善していくことが求められており、教育課程を核に教育活動や組織運営等の学校全体のあり方を見直していく「カリキュラム・マネジメント」の実現が重要視されている。

以上の点から、今求められている『学びの質』を向上させるためにも、また、今後ますます厳しくなる時代をよりよき方向へと変革していくことのできる子供を育成するためにも、研究主題とともに「**主体的・対話的で深い学びを通して 自信と夢をもち未来社会を切り拓く子供の育成**」という副主題を設定した。

3 研究の視点

今年度は次の3つの視点に基づいて、研究に取り組んでいきたいと考える。

(1)「主体的・対話的で深い学び」の充実

①「主体的・対話的な学び」の過程へのアプローチ

主体的な学びについては、学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組むことができるようにするとともに、自らの学びを振り返る場の設定も大切になってくる。特に学習の前後で「以前より、よくわかるようになった」「自分が成長した」という自覚をも

たせることが肝要である。授業を通して自らの学習の成果を明らかにして学習に対する意欲を高めていきたい。

対話的な学びについては、これまでも取り組んできた言語活動の充実に関する一定の成果と課題を踏まえておく必要がある。その上で子供同士の協働、教職員や地域の人の対話、などを手がかりに、教師の「問い」を重視・精選していきたい。学習過程を一層充実したものにし、自己のものにするために、話し合い、ディベート、ワークショップ等多様な方法で他者と対話する場面を単元全体や授業の中に明確に位置づけ、計画的、系統的、継続的に展開し、自らの考えを広げ深めることをねらいたい。

②深い学びの過程へのアプローチ

深い学びとは、習得・活用・探究という学習過程の中で各教科等の特質に応じた「見方や考え方」を働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学びである。質の高い深い学びを実現し、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けることができるよう「授業の工夫改善を重ねていくこと」を重視していきたい。対話的な活動の場を通じてお互いに学び合い、これまでの「見方や考え方」が更に成長したことを子供自身が自覚し、新たな発見を得ることができる授業を目指し、工夫を重ねていくことが大切である。今後各部会においても実践的な研究を深めていただきたい。

(2)「カリキュラム・マネジメント」で『学びの質』の向上を図る

「主体的・対話的で深い学び」を全校で取り組むためには、「カリキュラム・マネジメント」が必要となってくる。各学校における子供の実態や地域の実情を踏まえ、学校教育目標の実現に向けて、新学習指導要領等に基づき「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた教育課程を編成することが求められている。そして、学校教育目標で具体化された資質や能力が実際の授業や教育活動の中で実現されたかどうかをチェックし、その改善・充実(P・D・C・Aサイクル)の好循環を図っていくことである。

また、学校教育目標に基づいて、より具体的な「育てたい子供像」を明確にすることが、これからの「カリキュラム・マネジメント」では大切となってくる。今後育成すべき資質や能力を学校教育目標において具体化し、必要な教育内容や指導方法等を、教科や学年の枠を超えた教科横断的な教育課程全体の視野に立って効果を発揮できるようにすることが求められている。さらに、教育課程の実施に必要な学校内外の様々な人的・物的教育資源を効果的に活用していく取組を一層充実させることも重要である。そのためには教職員が全員参加で学校の特色ある魅力的な教育課程を創り出していくことがますます期待されている。

学校での学びが、学校だけの空間で閉ざされることなく、教科の枠だけに縛られるのではなく「社会に開かれた教育課程」の視点で「カリキュラム・マネジメント」を進めていくことが求められている。学校教育という営みを通じてよりよい社会を創成し、地域・社会と連携・協働しながらよりよき未来の創り手となるために必要な知識や力を育む『学びの質』の向上の実現につなげていけるよう各部会での実践に期待したい。

(3)子供たちとともに学び続ける教職員

子供たちとともに学び続ける教職員であることは、たえず自己の教師力の向上を図っていく学びの主体であることを意味する。我々教師には、その資質能力として教職に対する強い情熱、教育専門職としての確かな力量、そして総合的な人間力等実に多くの資質・能力が求められている。教育は時代の要請に応えるべく、その使命を担っている。目の前の子供への深い愛情を基盤に、たえず学び続け自分を高めていくことができるような教師でありたい。教育の不易の部分から軸足を外すことなく、新たな教育課程にも柔軟に対応できる指導力を備えた教職員でありたいものである。

本研究会がこれまで取り組んできた教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化により、子供たちの『学びの質』の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育てていきたいと考えている。また、これまでの教育実践を若手教員にもしっかりと引き継ぎつつ、授業を工夫・改善していく必要もある。

「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、自らの実践を研究会の場で提案し合い、お互いの優れた指導法を共有し『学びの質』の向上を目指し、工夫を重ねていくことを期待したい。共に考え高め合うことで、より高次の教育実践とし、目の前の子供たちの「主体的・対話的で深い学び」に結びつけたいものである。